

帰還兵士の苦難

——ティム・オブライエンの *In the Lake of the Woods*
(『失踪』) を読む——

野 間 正 二

…民（＝イスラエルの兵士たち）はそれぞれ、その場から町（＝エリコ）に突入し、この町を占領した。彼らは、男も女も、若者も老人も、また牛、羊、ろばに至るまで町にあるものはことごとく剣にかけて滅ぼし尽くした。…彼らはその後、町とその中のすべてのものを焼き払い…。(「ヨシュア記」347)

ティム・オブライエン (Tim O'Brien) (1946～) の『失踪 (*In the Lake of the Woods*)』は1994年に出版された。時代のおもな背景は1986年9月から10月。おもな場面はミネソタ州の北部でカナダと国境を接する実在のレイクオブザウッズ (Lake of the Woods) 湖の湖岸の貸し別荘とその周辺。その別荘は管理人の家にも車でゆかねばならないほど孤立した一軒家である。

その人里離れた別荘に、上院議員の予備選挙で大敗した41歳のジョン・ウェイド (John Wade) と38歳の妻のキャシー (Kathy) とが、選挙結果が出た直後にやって来る。心身の傷や疲れを癒すためだ。ところが、やって来て8日目に妻のキャシーが失踪する(3)。その妻の失踪について、夫のジョンは原因が分からないと証言している。そして最後には、ジョンも失踪する。

上の大まかな要約から明らかなように、時代背景と場面とからは、この作品は戦争との関連はあまり無いように見える。しかし実は、この失踪物語の核心には、ハベールも指摘するように (Heberle 257)、ベトナム戦争がある。

ジョン・ウェイドがベトナム戦争からの帰還兵だったからだ。しかもジョンは、日本ではソンミ (Son My) 村虐殺事件 (149) (作品中ではトュアンイエ

ン (Thuan Yen) あるいはミライ (My Lai) の虐殺とも表記) として知られている戦争犯罪に加わっていたのだ。

ソンミ村大虐殺は、1968年3月16日に米兵たちが、倫理的に許されない方法で (Franklin 43; Belknap 68)、約500人のベトナムの民間人 (米軍は347人以上、ベトナム側は504人としている (“My Lai Massacre”)) 殺害した大虐殺事件だ。ソンミ村では米兵は、ニワトリから家畜、そして犬、もちろん人間まで (Belknap 64) 「殺せるものは何でも殺した」 (“Vietnam” 52) のだ。「ヨシュア記」に描かれたエリコの町の惨状を再現したような事態が生まれたのだ。この事実が、1969年末ころからハーシュ (Seymour Hersh) などのジャーナリストたちの軍部の意向に逆らった努力によって、『タイム (Time)』や『ライフ (Life)』や『ニューヨーカー (The New Yorker)』などのメディアで写真つきで暴露された (“My Lai Massacre”)。

その恥ずべき大虐殺にジョンも加わっていたのだ。その18年前の過去の経験が、ジョンの予備選挙における地滑り的な大敗をもたらした。それだけでなく、物語の中心にある妻キャシーの失踪の謎の大きな要因となっている。

実際のところ、この小説は、歴史関係の作品に与えられる「フェニモア・クーパー賞」(1995年) を受賞している。またオブライエンは、この作品によって、ベトナム戦争を描いた作家のなかで最高の作家の地位を確実なものにして (Piwinski 196)、「アメリカにおけるベトナム戦争についての最も重要な書き手」(Heberle 1) と見なされることとなった。また『タイム』誌による「1994年度のベスト小説」にも選ばれた。さらにテレビドラマ化もされて、オブライエンの作品のなかで商業的にもっとも成功した作品となった (Herzog 1997, 145)。

語り方の特徴

先にも述べたように、この作品では、大まかに要約すれば、なぜキャシーは貸別荘から突然姿を消したのかという「中心的な謎 (a key question)」(Herzog 2000, 893) が、おもに夫のジョンの視点から語られている。その

意味では、この作品は「心理ミステリー」(Smith 117)と呼ばれることもある。しかも、そのおもな語り手だった夫のジョンも、作品の最後には失踪して行方不明になる。謎で始まったものが、謎を解消するというよりも、謎が深まって終わっている(Heberle 217)。従来の伝統的な謎解きミステリーではない。そのことが、この作品を伝統的な小説を超えたポストモダンな小説と分類される(Farrell 128; Heberle 223-24; Herzog 2000, 895; Melley 114)ゆえんでもある。

さらに、その謎のままで作品が終わるということ以外に、この作品がポストモダンと見なされる要因の一つに、語り方の工夫がある。たしかに、キャシー失踪物語の主筋の大部分は、夫のジョンの視点に入りこんだ語り手によって語られている。また、物語の一部は、キャシー自身の視点に入りこんだ語り手や、すべてを見通す神のような語り手によって語られている。これらの部分においては、いわゆる伝統的な物語の語り方がなされている。しかしこの作品では、「私(I)」を自称する語り手が物語の表層に顔をだすことがある。(※これ以降「私」を自称している語り手を「語り手の私」と表記する。)

「語り手の私」は、作品中にわざわざ「仮説(Hypothesis)」という章を8つ立てて、また「証拠(Evidence)」という章を7つ立てて、そのそれぞれにおいて、「語り手の私」を自称する形で作品中に姿をあらわす。そのうえ「語り手の私」は、自分が語ったことを補強するために、独立した136個もの「注釈(Notes)」さえもつけている。

読者はこのキャシー失踪の物語が、その多くがジョンの視点から語られているにもかかわらず、「語り手の私」によって語られている物語であることを、読んでいる途中でも鋭く意識することになる(Worthington 120)。読者はキャシー失踪物語の世界に無条件で没入するのが妨げられて、「語り手の私」の存在を意識せざるをえないのだ。特異なこの語り方の工夫をメタフィクション的と呼ぶ人もいる(Worthington 123)。

「語り手の私」は、作中のジョンと同じようにベトナム戦争に歩兵の上等兵(Private First Class)として参戦し、ジョンに深刻な影響を与えたソンミ村虐殺の現場に、その事件から1年後に行った(203)。ベトナムでのそうした

戦争体験で「語り手の私」の心は傷ついた (301n)⁽¹⁾。つまりベトナム戦争で心が傷ついた「語り手の私」は、同じベトナム戦争を戦い心身が傷ついたジョンにたいする熾烈な関心から、キャシーの失踪事件とその後のジョンの失踪に関心をもったことがわかる仕掛けになっている⁽²⁾。

だからこそ「語り手の私」は、1986年に起こったウェイド夫妻失踪事件から約3年も経過してからの1989年12月4日に、その失踪事件をよく知っている貸別荘の所有者ルース・ラスムッセン (Ruth Rasmussen) とジョンの母親エレノア・ウェイド (Eleanor Wade) とにインタビューを始めている。そして多くの関係者へのインタビューをつづけ、最後には1994年3月1日に、ジョンの先生エーラーズ (Lawrence Ehlers) へのインタビューをおこなっている。「語り手の私」は、1994年11月にこの作品を出版する (Herzog 1997, 146) のだが、その直前までインタビューをつづけている。ウェイド夫妻の失踪の謎に、つまりベトナム戦争がもたらしたものに迫りたいという、「語り手の私」の強い執念が読みとれる。

「語り手の私」は、4年強にわたる長期間、ウェイド夫妻の失踪事件の謎を追いつづけた。しかしその結果を、「語り手の私」は「4年間の懸命の努力のあとでさえも、私に残されたものは推測と可能性を超えるものはほとんど無かった」(30n) とか「私が手に入れたものすべては推測にすぎなかった」(53n) と語っている。あるいは「(キャシーの失踪について) 確定されたものは何もないし、解決されたものも何もない」(304n) と語っている。さらに、「もし(事件の謎の) 解決を求められるなら、この本のページを超えたところに目を向けていただくしかない」(30n) とも語っている。また、ジョンについても、「彼は知りようがない。私たちとは違う別人なのです。… [中略] … 私にとって、彼の魂は絶対的に入りこめない不可知なものです」(103n) と語っている。そしてそれでもウェイド夫妻の失踪の物語を語った理由を、「すべては推測だ。解答はないが、謎そのものが私を突き動かす」(269n) と説明している。

つまり作家オブライエンは、「語り手の私」を使って、ウェイド夫妻の失踪事件を「できるだけ忠実にかつ正確に再現しよう」(Farrell 126) としている。オブライエンは、フィクションである小説『失踪』を書こうとしながらも、

「語り手の私」を使って、フィクションではなく、ノン・フィクションを語るスタンスをとっているのだ。このねじれが、この小説の特異な点だ。

その結果、たとえば、キャシー失踪の謎についても、「仮説」の章において、次のような6つの可能性を提示している。(1)夫のもとから意図的に一人で逃亡した。(2)夫のもとから恋人の手引きで逃亡した。(3)湖での偶発的な事故で死亡した。(4)湖で自殺して行方不明になった。(5)夫とともに新天地で新しい人生を送るために夫と共謀して失踪した。(6)夫に殺されて、死体はボートとともに湖底に沈められた。そして、この6つの可能性のそれぞれをかんぜんに否定する証拠は、この小説内にはない(Worthington 122)。作者オブライエンは、キャシー失踪の謎の解答を読者にあたえるのを「かたくなに拒絶している」(Farrell 122)のだ。

「語り手の私」は、ひとつの解答をしめすのではなく、手の内を明かして正直に、すべての可能性を列挙して、読者にその解答を選ばせようとする。そのための手段が、伝統的な小説ではありえない、「語り手の私」がちょくせつ語る「仮説」であり、「証拠」であり、136個の「注釈」である。だから結果的に、この特異な「語り手の私」は、読者にこの失踪事件についてのある見方を強制するのではなく、読者がそれぞれ自分自身のものの見方でこの失踪事件を解釈する自由を与えている(Worthington 123)。むしろ、読者は自分の見方を構築することを強制されている(Heberle 223)といえる。あるいは、読者はこの物語を完成させる役割の一端を担わせられているともいえる。また、「語り手の私」は、現実の出来事の背後にひそむ真実は、人間にはわからないし語れないこと(Herzog 1997, 143)を読者に伝えているともいえる。

背景の1980年代のアメリカ

この作品の時代背景は1986年である。そしてこのキャシー失踪の物語は、1945年生まれのジョン・ウェイドを通しておもに語られる。ジョンは1967年に大学を卒業するとすぐに陸軍の上等兵(PFC)として入隊し、1968年にはベトナムに派遣された。そして2度負傷し勲章を得て、1969年11月に軍曹

(Buck Sergeant) (150) で除隊し帰国した。1970年にはキャシーと結婚した。その3年後には司法試験に合格して弁護士になり、政治に関わるようになった。1976年にはミネソタ州議会議員に当選し、1982年にはミネソタ州副知事に就任した。そして1986年にはミネソタ州の上院議員の予備選挙に立候補する。政治家として順調に成功していたのだ。

ジョンのように、ベトナム戦争からの帰還兵が政治の世界に進出して成功することは、1980年代のアメリカでは珍しいことではなかった。たとえばベトナム戦争からの帰還兵で、定員100名の上院議員にまで上りつめた人物だけでも少なくとも6人 (John McCain, Bob Kerrey, Al Gore, John Kerry, Chuck Hagel, Max Cleland) がいる。

その6人の中でも、この作品を読むうえで興味ぶかい人物はボブ・ケリー (Bob Kerrey) だ。1943年生まれ、ボブ・ケリー (作中のジョン・ウェイドは1945年生まれ) は、1966年に海軍に入隊し精鋭の特殊部隊 (SEALs) に配属され (ウェイドは1967年に陸軍に入隊) し、ベトナムで片足を失う名誉の負傷をしたあと、1969年に中尉 (Lieutenant jg) で退役 (ウェイドは同年に軍曹で退役) し、1970年には国家が軍人にあたえる最高の勲章である「名誉賞 (The Medal of Honor)」を受賞 (Vistica 2003, 10-11) (ウェイドも負傷し格下ではあるが勲章も受賞) している。その後ケリーは、レストラン・チェーンで成功したあと、1982年から1986年までネブラスカ州の知事になり (ウェイドは1982年から1985年まで州の副知事)、そして1988年から2000年まで上院議員にまでなっている (Vistica 2003, 134, xvii) (ジョンは1986年の上院議員の予備選挙に出馬している)。その間の1992年にはケリーは、民主党の大統領候補の一人になっている (Vistica 2003, 151)。現実のケリーが上院議員になるまでの経歴は、作中のジョン・ウェイドのものと驚くほど酷似している。つまりジョン・ウェイドの人物造型には、こういう当時のアメリカの政治の現実が反映されているのだ。

さらに2人の間には、作家の意図とは別に、現在の読者には興味ぶかい類似点が存在する。ケリーは、1969年2月25日に指揮していた特殊部隊 SEALs の部下6名とともにメコンデルタのターンフォン (Thanh Phong) で、老人

や婦女子の民間人20人以上を殺害したのだ (McGeary 25)。この事実は、部下のクラン (Gerhard Klann) の告発によって、2001年4月24日に明らかになった (McGeary 26; Vistica 2016, 1)。告発者のクランは、ケリーの命令による意図的な虐殺であったと主張した。しかしケリーは、20人以上の民間人を殺害したという事実を認めたが、虐殺は故意ではなかったと自己弁護した (McGeary 26-27)。事件から32年後の告発は、マスコミの話題にはなったが、戦争犯罪として公に裁かれることはなかった。結局、ケリーは任務を遂行したのだという考えを世間は受け入れた (*Republic* 11) のだった。というのは、この告発によっても、ケリーは、ジョン・ウェイドとは違って、著名人としての経歴は決定的なダメージを受けることがなかった (McGeary 33) からだ⁽³⁾。

ところで当時の政治の世界の現状以外にも、1980年代のアメリカ社会の現状が、この作品には強く反映されている。ベトナム戦争の後遺症とでも呼ぶべきものである。ベトナム戦争は、アメリカが本格的に介入してから10年以上つづいた。そして1975年にアメリカの敗北で終わった。このベトナム戦争は、アメリカ社会に大きなインパクトをあたえた。その一つは、かなりの数の兵士たちが、アジアの戦場で心に傷を負ったために、帰国後にアメリカ社会にうまく適応できなかったことに見いだされる。帰国後に彼らは失業したり、アルコールや薬物の依存におちいったり、離婚したり、自殺したり、殺人を犯したり、極端な場合は妻を殺害して自殺したりした (野間 1-3, 19-22)。そして彼らの異常なふるまいが、1970年代前半から、メディアでさかんに取りあげられて、社会の関心を引くようになった。社会問題化したのだ。

社会状況のそうした変化を背景にして、帰還兵士や帰還兵士を治療していた臨床医が中心になった活動で、帰還兵士の上記のような異常なふるまいが、戦争によるストレスから生じた心の病気であると認められるようになった。1980年には、米国精神医学会が、そうした心の病気を PTSD (心的外傷後ストレス障害) と名づけて公式に病気として承認した。

戦場での耐えがたい経験が、兵士の心にストレスをあたえて傷となり、その後の元兵士の正常なふつうの日常生活を送るのを困難にすることがある。そのことが、広く世間に認められるようになったのだ。また、本作品でも引用され

ているハーマン（Judith Herman）の著書『心的外傷と回復（*Trauma and Recovery*）』（1992年）が専門家だけでなく広く一般に読まれたという現象にも、戦争神経症（PTSD）の理解が社会に広まっていった傍証を見いだすことができる。

1980年代に始まった戦争神経症にたいする理解は、広く社会に定着し、1994年出版のこの『失踪』にも強い影響をあたえている。むしろ、その理解が前提となっている。

たとえばジョンは、1969年11月に除隊になり、米国に帰還したときも、最愛の恋人のキャシーに、帰国の日時を連絡せずに、キャシーが住んでいた大学の寮に直行して、その後2日間も身を隠しながらキャシーの行動を監視しつづけている（41-45）。異常な行動だ。そのキャシーを尾行している間も、ジョン自身が「まだ滑りつづけている」（42）と感じている。その後も「一晩中くらくらする遊離感覚がまわりついていた」（42）と心身の不調を感じている。また「夜明け近くのある時点で、気がつくと、目覚めて床にうずくまって、暗闇と対話していた」（42）と、異常なふるまいをしている。さらにキャシーをバス停で見張っている間も、「両目が痛んだし、心も、あらゆるところが痛んでいる」（43）と感じている。心の傷が、身体の痛みや異常な感覚や異常な行動となってあらわれているのだ。

そのうえ1970年にキャシーと結婚してからも、就寝中のベッドで、「思いつくことができる最悪の憎悪表現」（Melley 112）である「キル・ジーザス（Kill Jesus：キリストを殺せ）」と、汚い罵^{ののし}り言葉を寝言で何度も叫んで、隣のキャシーを怖がらせている（188）。

ベトナム戦争から帰還したジョンは戦争による神経症の症状をあきらかに示している。

これらのジョンの異常な状態の記述は、戦争によるストレスは神経症を生みだすことがあるという、1980年代に広く認められるようになった理解をもとにしている。1990年代当時の読者も、ジョンのふるまいや心身の状態を読んだだけで、ジョンには戦争による神経症の症状が出ていると理解できた。

上院議員予備選挙大敗のあとのジョンの異常なふるまいの数々も、戦争神経

症の理解をもとにしている。たとえば、ジョンは、貸別荘の寝室で夜中に寝汗をかいて2度も起きて、微熱を感じ、頭が変になった気がしている（47）。そして妻が寝ているベッドのかたわらで、「敵兵の目玉をえぐり出せ、——拳で殴れ、爪でえぐれ、——殴るんだ、爪を立てるんだ、殴打するんだ、噛みつくんだ」（47）と、過酷で残酷な接近戦の場면을想像している。フラッシュバックが起きている。フラッシュバックは戦争神経症の症状の大きな特徴だ。この異常な興奮のさなか、神がいるのであれば神をも殺したいと念じている（47）。それだけでなく、真夜中に、ここでも「キル・ジーザス」という呪いの言葉を吐きながら、鉄の大きなヤカンで熱湯をわざわざ沸かして、その熱湯を室内のゼラニウムなどの観葉植物にかけている（133）。その同じ夜中に、気がつくと、裸になって「湖に腰まで浸かって」（134）いた。そして次に気がつくと、裸で「震えながら栈橋に座っていた」（134）のだ。

これらの異様なふるまいだけでなく、自分のその時の行動の記憶がとんでいく点でも、戦争神経症の症状が深刻なかたちであらわれている（Herman 42-47; Melley 107）。これは、約18年前のベトナム戦争で生じた神経症が、選挙の敗北による大きなストレスによって、より深刻なかたちで再発したと考えられる。これは、ハーマンが、激しい戦闘を経験した者は戦後15年後においても「36%」（Herman 57）がPTSDであると診断されたと語っていることも矛盾しない。

その他にもうひとつ1980年代の社会状況を反映している要素が、この作品にはある。それは、その当時の社会に広く認知されるようになったアダルト・チルドレンという考え方だ。1981年にブラック（Claudia Black）の『私は親のようにはない（*It Will Never Happen to Me!*）』そして1983年にはウォイティッツ（Janet Woititz）の『アダルト・チルドレン（*Adult Children of Alcoholics*）』が出版された。両著とも百万部以上が売れるベストセラーになり、一般人にも広く読まれ、アダルト・チルドレンという考え方が一般化した（斎藤 84-85）。さらにつけ加えるならば、1992年11月に大統領に当選したクリントン（Bill Clinton）が、大統領候補だったときに、自分がアダルト・チルドレンだったと告白して注目を集めた（斎藤 82-83）ことも、アダル

ト・チルドレンという考え方が、すでにこの時期には社会に広く受け入れられるようになっていたことを示している。

アダルト・チルドレンというのは、アルコール中毒の臨床的な研究のなかで生まれた考え方だ。親がアルコール中毒である家庭で、つまり親が親としての役割をじゅうぶんに果たせていない家庭で育った子どもは、成長の過程で問題が生じることがあるのが明らかにされた。そういうアル中の親のもとで成長して、問題を抱えこんだ人を「アダルト・チルドレン」と呼んだ。

このアダルト・チルドレンの考え方は、ジョンの父親がアル中であるという設定に見いだせる。ジョンが11歳の夏には、父親のアル中が悪化して、父親は治療施設に強制入院させられた (99)。アル中の父親の存在がどんなものだったかといえば、母親が「父が家からいなくなったことに安堵しました」 (99) とか、「(父が施設に入ったことで) とつぜん緊張が消えてしまったのです。椅子の端に浅く腰をかけて夕食をとらずにすむようになった」 (99) と告白していることから推測できる。家族団欒^{だんらん}の夕食の席さえも、アル中の父親のとつぜん激変する感情やふるまいに、家族は緊張して椅子から腰を浮かせながら食事をしていたのだ。そして治療所に入院しても「良くなることは全くなかった」 (99) けれども、父親は数カ月で出所してきた。だからジョンと母親とは、1959年にジョンが14歳のときに、父親がガレージで首つり自殺する (197) まで、父親のアル中に長年苦しむことになった。この経験は、ジョンに心の傷 (トラウマ) を残したのは間違いない (Melley 116; Cohen 222)。

そういう家庭のなかで、ジョンは9歳か10歳のころからマジックに熱中するようになった。土曜日には40分もバスに乗りマジックショップに一人で通うようになった (62)。そして自宅の地下室のスタンド式の鏡の前で、一人で何時間もマジックの練習をするようになった (65)。とうぜん、他の子どもたちと外で遊ぶ機会が少なくなり、友だちもいない独りぼっちの肥満気味の子になった。父親は、運動嫌いの「プリンプリンのジョン (Jiggling John)」 (67) と^{からか}と揶揄^{からか}っている⁽⁴⁾。

しかし鏡の前でマジックの練習をしていると「奇跡が起こる鏡の中では、もう独りぼっちのチビちゃんではない」 (65) と、ジョンは感じる事ができた。

鏡の中の世界で「ジョン・ウェイドはおもに生きていた」(65)とさえ言える状態になった。自分のマジックを映しだしている鏡の中の世界では、アル中の父親のもとでの厳しい日常の現実を忘れることができただけでなく、「どんなことも、幸せさえも可能だった」(65)のだ。

そしてジョンは、その鏡を瞳の裏にも思い描き、その頭の内の鏡に自分の願望を映しだして、現実を直視しないで生きる方法を身につけた。頭の内にその鏡の世界を創りだすことで、「彼は安寧と安心を感じることができた」(66)のである。父親がアル中であることも、その結果として異常な緊張や沈黙が家庭内を支配していることも、父親が自分に安定したじゅうぶんな愛情を注いでくれないことも忘れることができた。そうすることでジョンは、父親がアル中という機能不全な家族のなかで、どうにか生きのびることができた。

一方、アダルト・チルドレンの特徴は、ウォイティッツによると、「夢やファンタジーの中のおとぎ話の世界に生きはじめる。現実には起きていることを信じたくないために、願望を大いなる糧にして生きる」(9) ことにある。またアダルト・チルドレンは、「自分の感情を内に秘めておくことを学び」(Woititz 17)、孤立しがちである。そして「日々の混乱した生活から逃れて、結果としてファンタジーの内に生きることがある。自分自身の創りだした自分だけの世界の中に生きる」(Woititz 38-39) ことがあるのだ。

このようなアダルト・チルドレンの特徴は、先に挙げたジョンが地下室で鏡の前で数時間も一人でマジックに熱中して、さらに頭の内にも鏡を創りだして、その鏡の世界に自分の願望を反映し「自分のために作り替えた世界を創造し」(Smith 128) ている点で、ジョンのそれと一致している。ジョンの子供時代のふるまいは、自分が創りだした世界に閉じこもり、現実の苦しみと悩みとを忘れ、安寧と安心を得ている点で、アダルト・チルドレンのふるまいの特徴と一致している。

また、成長してからのジョンのふるまいにも、アダルト・チルドレンの特徴があらわれている。たとえばジョンは、2匹の蛇がお互いの尾を飲み込んで一つの輪になっているのを戦場で見た、そして円環となった2匹の蛇は自分たち2人の愛の象徴であると、キャシーに手紙をベトナムから書いている (61)⁽⁵⁾。

ジョンが見たと称している、お互いの尾を相食む2匹の蛇は、神話上の存在であるウロボロス (uroboros) に想をえたものだろう。だが、もちろん実在するものではない。人間の想像力が生み出したものだ。ジョンは、自分が想像したものを実在しているものとして、キャシーに語っているだけでない。そこに自分たち2人の理想の愛のかたちが見いだせると、それを使ってキャシーへの愛を伝えようとしている。ここでも、ジョンは自分にとって都合の良い空想世界を現実として扱って、それを自分のために利用している。アダルト・チルドレンの特徴があらわれている。

あるいはまた、ジョンはキャシーに初めて出会って数カ月後の1966年11月初旬には、キャシーを尾行しはじめる。愛する女性を尾行するというこの行動を、実は、結婚後も、ベトナム戦争からの帰還後も、ジョンはつづける。このふつうでない行動は、アダルト・チルドレンのひとつの症状である。というのはアダルト・チルドレンは、機能不全の家族のなかで育っているから、常に愛情を求めるけれども「自分が他人から本当に好かれているとは信じられない」(Woititz 18) という感覚を抱いているからだ。「キャシーの自分への強い関心に確信がもてない」(Young 133) ジョンは、その不安を解消するための、愛されていることを確認するための、身を隠しての尾行なのだ。

またさらに、ジョンがベトナムを志願したのも「傷つけたり、傷つけられたりするのでもなく、良き市民や英雄や道義をわきまえた人になりたいためでもなく、ただ愛のために、愛されるためだった」(59) と、「語り手の私」は説明している。この説明にも、他人の愛を渴望するアダルト・チルドレンの特徴が良くあらわれている。さらに「語り手の私」の「これは愛の物語なのだ」(304n) という一見謎めいたコメントも、この作品が愛されることを求めつづけるアダルト・チルドレンたるジョンの物語だと解すれば、納得がゆく。

これらのことを考慮すれば、作家オブライエンは、1980年代には広く認められるようになったベトナム帰還兵士の政界進出の現象や、戦争によるPTSD (戦争神経症) や、アダルト・チルドレンという考え方を利用して、1994年に出版された作品の主人公ジョンの人物像を創りだしたと思われる。

ソンミ村での経験とその結果

ジョンの人生設計の破綻^{はたん}のちよくせつの原因は、1986年9月の上院議員の予備選挙に地滑りのな敗北にある。しかしその大敗北の原因は、ベトナムのソンミ村で大虐殺をおこなったカーリー（William Calley）中尉のひきいる小隊の一員だったことを、ジョンが隠して生きてきたことにある。選挙期間中に、対立候補によって、ジョンはソンミ村の虐殺を実行した部隊の一員であったことが暴露され、新聞でセンセーショナルに報じられたのだ。1974年11月には首謀者カーリー中尉すらすでに仮釈放されていた（Belknap 268）が、有権者は1986年になっていたにもかかわらず、ジョンの18年前の悪行とその隠蔽^{いんぺい}を許さなかった。その結果、嘘つきの悪人とされたジョンは、大敗して、政治家としての人生を失った。それだけでなく、妻のキャシーも失踪してしまい、人生の展望そのものをも失った。

ただしジョンは、カーリー小隊の一員ではあったが、ソンミ村の大虐殺に積極的に加わったわけではなかった。その無差別の殺戮^{さつりく}には、むしろ批判的だった。「やめろ（No）」とか「お願いだ！（Please !）」（109）という言葉を叫びながら、その虐殺現場から遠ざかろうとしていた。しかし無差別の殺戮の異常な雰囲気の中で、アルジェ（Algiers）のムルソー（Meursault）のように、ジョンの言葉を使えば「太陽の光（the sunlight）」（205）のせいで、冷静さを欠いていたジョンも、鋏^{くわ}をもった老人を銃をもった敵兵のベトコンと見誤り撃ち殺してしまう（111）。さらに、ジョンが用水路の底に逃げこんでいたとき、とつぜん用水路を覗きこんだ上等兵ウェザビー（Weatherby）に「反射的（reflex）」（75）に発砲して殺害した⁽⁶⁾。

たしかにジョンはソンミ村の虐殺に積極的に加わったわけではない。しかし、たんにその場に居合わせただけでもない。ただし居合わせただけだとしても、作家オブライエンは「その場に居合寄せたことがじゅうぶん罪悪（guilt）なのだ」（*Things* 171）と、別の作品の主人公に語らせている。もちろんジョンは、居合わせて戦友たちの悪行を目撃していただけではなく、自分自身も民間

人の老人を一人と戦友一人とを殺害している。戦場とはいえ、またその意図はどうであったにしろ、罪を犯したのだ。「語り手の私」も「最終的には、この日の重みが耐えがたいものになるだろうという気がジョンには生じた」(110)と解説している。

しかしジョン自身は「こんなことは起こりえない。だから起こらなかったのだ」(111)と、自分に言い聞かせて、現実のこの重い出来事を心から消去しようとしている。そういう心の操作をすることで、「すでに気分がすこし楽になっていた」(111)とも語られている。

しかし、もちろんソンミ村でのこのショッキングな出来事の経験と記憶は、ジョンのその後の人生に大きな影響をあたえた。まず、この虐殺の直後から、ジョンは「戦争のなかで自分を忘れよう (tries to lose himself in the war)」(271)として、「異常に危険なこと」(271)や「考えられないような行動」(271)をあえて行うようになった。その結果、重傷をふくむ2度の負傷をした(271)。そしてその負傷の痛みこそが、ジョンの体と心とがバラバラになるのをかろうじて防いでいた(271)と説明されている。

ソンミ村の経験は、ジョンの体と心とがバラバラになるような強烈な心の傷を残した。その結果、その心の傷を意識しないで済むには、生命の危険に身を曝^{さら}すという瀬戸際に身を置くか、負傷の痛み^に身をゆだねるより仕方がない状況に追いこまれていたのだ。

つぎの影響は、ほんらい1年で帰国する予定だったのを、この事件を経験したあとでは、ジョンは自らの意志で、ベトナムでの兵役をさらに1年間延長した(150)ことに見いだせる。1年間延長した理由を、「(ソンミ村の経験のあとでは)ジョンは自分のなかの確たる部分との繋がりを失ってしまった。その泥沼から身を救い出せなかった」(150)からだ^と説明されている。漠然としたよく分からない説明だ。一方でジョン自身も、恋人キャシーへの手紙で「いつか説明できる日が来るかもしれない、しかし今すぐにはこの地を離れることはできない。私はいくつかのことをやらねばならない、それをやってしまわないと、どうしても帰れないのだ。正しいやり方ではないから」(150)とのみ書き送っている。恋人のキャシーは誰よりもジョンの無事で早い帰国を待ち望

んでいた。そのキャシーにさえも、ジョンはさらに1年間戦場に残る理由を説得的に説明することはない。

しかし戦場での滞在を1年間さらに延長することは、キャシーとの再会が1年間延びるだけではない。戦死をふくむ戦傷の可能性がさらに1年間延びることを意味する。生死を賭けた決断である。ジョンにとって、それほど重大な意味を、ソンミ村での経験はもっていたのだ。

このままでは帰国はできない。さらに1年間戦場に残る。その重い決断は、これからの1年間に帰国する根拠がやがて見いだせるだろうという確信があつての決断ではなかった。だからキャシーへの先の手紙は、相手の気持ちを考えないジョンの酷薄な一面をあらわしている。しかし一方で、ジョンの内実を正直にも語っている。

このままでは帰れないという決断はジョンには真実だ。しかしもちろん、それなら何時になつたら帰れるのかという確信はまったく無い。とりあえず命の危険にさらされつづける戦場に身を置くことで、ソンミ村での自分の行動や経験したことの意味を反芻^{はんすう}しようとしていたのかもしれない。あるいは命をかけて国家に兵士として奉仕することで、ある種の償い、ある種の「禊ぎ^{みそぎ} (cleanse)」(Young 132; Herbele 253)、ある種の「自己処罰 (punish himself)」(Herbele 225) をしようと漠然と考えていたのかもしれない。

しかし偶然という運命が、ジョンに働く。兵役2年目の任期が切れる2カ月前に、ジョンは負傷したことで前線から離れて、大隊本部のデスクワークの仕事に就くことになった (272)。そのことによって、ジョンはベトナムでの自分の経歴を改竄^{かいざん}するチャンスを手に入れた。事務所に一人で閉じこもって、実際にはチャーリー (Charlie) 中隊に属していたのに、書類上はアルファ (Alpha) 中隊に属していたかのごとく書き換えた。ソンミ村の虐殺とは無縁の人間であることを、関連する文書を書き換えて書類上は証明したのだ。その改竄は100パーセント完璧ではなかったが、うまくいきそうに思えた (272)。

書き換えの完了は、ソンミ村の虐殺の経験を書類上では消去できたことを意味していた。ソンミ村の虐殺とある種の折り合いをジョンは無理やりつけたのだった。ジョンには、もはやベトナムにさらに留まる理由が表面的にはなくな

った。書き換えが完了してから「一週間後」(272)に、ジョンは一種の安堵感や達成感と、それでも消えぬ不安とを抱きながら本国に帰還した。

帰国してからのジョン

帰還後のジョンに残されていたのは、ソンミ村の経験とその後の文書改竄とを忘れることだった。うまく忘れられれば、不安はなくなる。しかしそれは成功しなかった。心の中の秘密として守らなければならなかった。

しかしその秘密はあまりにも重いものだった。他人の目から守りきれものではなかった。おのずと染みでた。もちろん一番身近にいた妻のキャシーには、ジョンが重大な秘密を抱えて生きていることが感じられた。たとえば、キャシーは、ジョンに向かって「よく分からないけど。ときどきドアと一緒に暮らしているような感じがするの。入ろうとして、押しつづけるけど、そいつはぴちっと閉まっていてちっとも動かせないの」(156)と不満をもらしている。ジョンは心に重大な秘密を抱えているようなのだが、それをけっして明かしてくれないと抗議している。あるいは、もっと直^{ちよくせつ}截に、キャシーは「(隠し事があったとしても)でも、あなたは話してはくれないでしょう、違う?つまり、あなたに秘密があったとしてもね、あなたはけっして白状しないでしょう」(157)と言っている。

ジョンは秘密をかたくなに守ることで、夫婦関係をギクシャクさせている。穏やかな結婚生活を守るよりも、ソンミ村の経験と文書改竄との秘密を守る方を優先している。それほどに、ベトナムでの経験はジョンの心に傷をあたえ、その後の生活を重苦しく支配している。戦場から生きて帰ってきても、ベトナムでの経験のために、ジョンが帰還後に払っている犠牲は大きい。

ところが、その犠牲は、ジョンがベトナムの戦場でたまたまカーリー中尉の小隊に属していて、ソンミ村の虐殺に遭遇したということに起因している。しかしこれら一連のことは、ジョンの意志で拒否できたり選択できるものではなかった。偶然の結果によるものだった。そのうえ、ソンミ村でのその時のジョンのふるまいは、先にも指摘したように、その時のジョンの積極的な意志が反映

されているというよりも、その場の環境や雰囲気が生みだした受動的なものであった。その意味でも、ジョンは戦争による犠牲者なのである。

しかもそのうえ、文書の改竄は、ジョンが他の戦友たちと違って、ソンミ村の経験を自分なりに消化できずに心に抱えこんで、人よりも苦悩していたことに大きな原因がある。苦悩していたからこそ、兵役の延長をみずから申しでたのだし、戦場ではあえて危険な戦い方をしたのだし、文書の書き換えという犯罪に手を染めることになったのだ。そしてその苦悩は、ジョンがある種の倫理感や正義感を戦場でももちつづけていたから深まった。倫理感や正義感をもちつづけること自体は、けっして非難されることではない。人間としては、むしろ真つ当なことだ。しかしその人間としての肯定されるべき美質が、戦場では結果的に、彼を他の戦友よりも深い苦悩に落とし入れ、罪をさらに犯させている。ここには戦場のもつアイロニーに翻弄されている一人の善良な兵士の姿がある。この点に、「語り手の私」も読者もジョンに引きつけられる要素がある。

そのうえジョンは、帰国してからも、苦悩を深める事態に直面しなければならなかった。帰国した1969年11月直後から、ソンミ村の虐殺事件が報道されはじめた。やがて写真つきの報道によって、残忍な虐殺事件を非難する声が世界中で巻き起こった。そうした世論に押されて、アメリカ軍も、1970年11月から1971年3月までソンミ村虐殺を裁く軍事法廷を開いた（Belknap 263-64）。

しかしジョンは、ソンミ村の虐殺にカーリー小隊の一員として関わっていたが、裁判に呼び出されることはなかった。ジョンは、小隊ではおもに渾名^{あだな}の「魔術師（Sorcerer）」と呼ばれていて本名がよく知られていなかったし、小隊には親しい戦友もいなかったからだ。さらに軍の書類の書き換えによって、虐殺を実行したチャーリー中隊ではなくアルファ中隊に属していたことになっていたからだ。帰国直前におこなった文書の改竄という犯罪行為が社会的には功を奏していたのだ。

一方で、1969年11月に帰還したジョンは、1970年4月にはキャシーと結婚した。帰国後は弁護士になるための勉強をつづけ、1973年8月には弁護士の資格をとった。カーリー小隊の他の戦友たちが世間の非難のただなかで裁判を受

けている間、ジョンは自分の幸せを目ざして階段を着実に昇っていたのだ。

しかしその間、ジョンの心中は穏やかではなかったはずだ。自分は文書改竄という違法行為をしたことで、世間の非難と軍事裁判とをまぬがれているという罪悪感と後ろめたさに苦しんでいたに違いない。その罪悪感と後ろめたさとは、事実を公表できず心中に秘しておかねばならないという重圧のもとで、ますます倍加したと思われる。彼の心は激しく苦悩していた。そのこともあり、妻のキャシーは、ジョンには精神分析医との面談が必要だと内心では考えていたり (75)、奇声をあげて悪夢にうなされるジョンに別人格を見だして恐怖を感じていたり (76) している。「ソンミ村の記憶に苦しめられて結果的に反復的に起こる PTSD の発作に苦しめられていた」(Piwinski 200) だけでなく、ジョンはその後の文書改竄という犯罪行為とその結果の裁判逃れにも良心の呵責を感じている。ジョンのストレスは減じることがなかった。とうぜん戦争による神経症 (PTSD) の症状は悪化することはあっても、快方に向かうことはなかった。

帰還してからのジョンは、戦場での経験、とくにソンミ村での経験とその後の文書改竄という犯罪行為とに苦しんでいるだけでなく、文書を書き換えて自分だけが軍事法廷を卑怯にもまぬがれているという結果にも苦しんでいる。そのうえ、それらの苦しみがもたらす夫婦間のぎくしゃくした関係にも苦しんでいる。帰還兵士は、生きて帰ってきても、戦場での行為や経験の記憶だけでなく、その行為や経験が帰国後に生みだす結果によっても苦しまなければならないことがある。これも帰還兵士が耐えねばならない苦難の一つである。戦争の生みだすこの残酷な事実を語っている点にも、この作品の読みどころがある。

戦争体験とその代償

しかし兵士ジョンの帰還後の苦難は、これだけでは終わらない。彼が記録からも記憶からも消去しようと約18年間つとめてきたソンミ村の虐殺への関与が、最悪のかたちで白日のもとに晒^{さら}された。下院議員の予備選挙の選挙運動の最中、地元の新聞によって大々的に報じられたのだ (295)。その事実をミネ

ソタ州の選挙民全員が広く知ることになった。その結果、無^む辜^この婦女子と老人を虐殺した戦争犯罪人であるだけでなく、公文書を改竄して罪を逃れようとした卑劣な人間という烙印を押された。

1969年にベトナムから帰還して以降、ジョンが政治家として13年以上にわたって営々と努力して築いてきた人生、そのなかには選挙（政治）のために自分の子どもを堕胎するという犠牲もふくまれるが、その人生はゼロに帰した。むしろマイナスになった。真相が暴露された直後から、キャシーとの結婚生活も破綻^{はたん}の危機にひんしたのだ。ひとつには、ジョンがあまりにも重大な秘密を結婚以来ずっと隠しつづけていたからだだった。キャシーの夫への不信が極限に達したのだ。さらに、自分の人生の展望をとつぜん絶たれ強いショックを受けたジョンが、茫然^{ぼうぜん}自失^{じしつ}のなかで、あるいは戦争神経症の悪化のなかで、苦しんでいる妻キャシーへの適切な対応ができなかったからでもある。

そして最終的には、キャシーの失踪と、それにつづくジョンの失踪というかたちで、帰還兵士ジョンの苦難は終わりをむかえる。ジョンの戦場での経験とその経験を消し去ろうと18年間も努力した結果とが、キャシーとジョンという名の2人の人間をこの地上から消し去ることになった。皮肉な悲しい結末である。

ここまでは、この物語のおもな語り手であり主人公でもあるジョンを中心にジョンのベトナム戦争の経験とその後の結果とについて検討してきた。そしてジョンが妻とともに、この地上から、少なくとも生活基盤のあるミネソタから姿を消さざるをえなくなったことを明らかにした。つまり主人公であるジョンを通して、戦場での経験とそれが生みだす苦悩と苦難とがこの作品では描かれていることを明らかにした。

つぎに、この作品の「中心的な謎」であるキャシーの失踪の観点から、この作品のもっている意味について考えてみよう。キャシーの失踪について、「語り手の私」は、先にも述べたように、次のような6つの可能性を提示している。(1)夫のもとから意図的に一人で逃亡した。(2)夫のもとから恋人の手引きで逃亡した。(3)湖での偶発的な事故で死亡した。(4)湖で自殺して行方不明になった。(5)夫とともに新天地で新しい人生を送るために夫と共謀して失踪し

た。(6)夫に殺されて、死体はボートとともに湖底に沈められた。

この6つの可能性のなかで、もっとも楽観的なものは、知人のカーボ(Anthony Carbo)が5つの傍証をあげて主張している(299)ような、(5)「夫とともに新天地で新しい人生を送るために夫と共謀して失踪した」である。2人が示しあわせて、ミネソタでの八方ふさがりの状況から逃れでるために、カナダへ脱出した可能性である。

しかしこのもっとも楽観的な状況であっても、これまで結婚して16年にわたって2人で築きあげてきたミネソタでの生活、上院議員候補者にまでなった生活を捨て去ることを意味している。2人には預貯金はなかったが、2人はセレブだった。世間から見れば、2人は若くて有能な政治家とその美しい妻だった。その社会的な地位を、隠しつつけていたソンミ村事件への関与が暴露されることで、一気に失った。2人は大きな犠牲を強いられたのだ。

ところがソンミ村の虐殺は、ソンミ村の事件で有罪判決を受けたのはカーリー中尉一人であった(Farrell 132)ことから分かるように、もともとはジョン個人の責任を問えない側面もある戦争中の事件であった。それにもかかわらず、ジョンはすべてを失ったのだ。この一気の喪失は、ジョンがベトナムで戦争を戦ったことに起因している。とすれば、このもっとも楽観的な解釈をとった場合でも、『失踪』という作品は、ジョンという大学出のごく一般的な元兵士が帰国後も払わなければならなかった犠牲と耐えねばならなかった苦難とを描いた作品だといえる。

つぎに、(1)「夫のもとから意図的に一人で逃亡した」、(2)「夫のもとから恋人の手引きで逃亡した」、(3)「湖での偶発的な事故で死亡した」、(4)「湖で自殺して行方不明になった」の4つの可能性について考えてみよう。

この4つの場合に共通するのは、妻のキャシーが夫のジョンにこれまでのような愛情をもてなくなったという要因だ。(1)と(2)と(4)とについては、ジョンとの結婚生活からの逃避をあらわしているから、ジョンに愛情がもてなくなったのに起因しているは明らかだ。(3)「湖での偶発的な事故で死亡した」については、一見すれば、夫婦間の愛情とは無関係のように見える。しかしキャシーの失踪は、真夜中の出来事である。愛し合っている夫婦において、

妻が真夜中に夫に黙って一人でボートを小屋から引きだして湖に出てゆくことはありえない。夫婦間の愛情が冷めきっていた証拠である。

キャシーの夫ジョンへの愛が冷めた最大の原因は、たとえ「すでにひびの入っていた結婚」(Herzog 1997, 147)を送っていたとしても、ジョンが重大な秘密を隠しつづけていたことが、新聞のスクープによって明らかになったことにある。たしかに、たとえジョン自身から虐殺への関与と文書改竄とを告白されていても、キャシーはショックで愛情が冷めていたかもしれない。もちろん、そのことを恐れて、ジョンは秘密を守りつづけていたのだ。しかしキャシーは、新聞のスクープによって、つまり他人から、夫の過去の醜悪な秘密を知らされた。夫の恥ずべき秘密を、他人からとつぜん聞かされて、初めて知ったショックは想像を絶するほど大きなものだったはずだ。これまでの愛情も一気にさめるほどのショックだったに違いない。ファレル (Farrell) も、そのショックはキャシーが姿を消すほどのものだったと推測している (130)。だからこれらの4つの場合の「失踪」も、元をたどれば、ジョンがベトナム戦争にかかわる重大な秘密を妻のキャシーに隠しつづけていたことに起因している。つまりジョンのベトナム戦争体験が生みだしたものだ。

最後に、最悪の結末 (6) 「夫に殺されて、死体はボートとともに湖底に沈められた」の場合を考えてみよう。「仮説」では、ジョンがキャシーに熱湯をかけて殺害したあとで、その死体をボートとともに湖底に沈めた可能性が語られている (274-78)。もちろん、この可能性を否定する証拠もこの作品にはない。むしろ、キャシーが失踪した同じ夜に、ジョンが煮えたぎる熱湯を観葉植物にかけているだけでなく、意識が戻ったときには、裸で湖に浸かっていたり、栈橋に裸で座っていたりしていたという異常な行動を考慮すれば、多くの批評家が指摘するように (Cohen 232; Farrell 131-32; Franklin 42-43; Pinwinski 201)、この最悪の場合の可能性はかなり高い。

そのうえ作品の最後では、ジョンの失踪が語られている (283)。そうであるなら、戦争神経症に苦しむアフガニスタンからの帰還兵士が、妻を殺害し、その後で自分も自殺するといった事件 (『朝日新聞』) を想起させるものだ。また、妻の殺害方法の残忍さは、戦争神経症に深刻に苦しむ帰還兵士は、妻にた

いしてここまで残忍になれる可能性があることを暗示している。しかも妻が失踪したその夜の自分のふるまいをほとんど覚えていなくて、断片的にしか記憶していないというジョンの証言を信じるならば、自分がやったその残酷な行為が記憶からとんでいるのだ。そのことは、戦争神経症に苦しむ患者に記憶の欠落が生じる症例の報告とも一致している。

ジョンは、先にも指摘しておいたが、子供時代には、アル中の父親からの心理的な虐待や父親のとつぜんの自殺によって、心に傷を負っていた (Melley 117)。そしてそういうアダルト・チルドレンは「人生にトラウマを呼び込みやすい人々である」(斎藤 113)。その要因もあるのだろうが、ジョンは帰国直後から戦争神経症の症状をしめしていた。そうした心の傷が、隠しつつけていた過去の自分の卑劣で恥ずべきふるまいが暴露されたショックと、それが原因で選挙に大敗して人生の展望を失ったショックとで、さらに悪化して顕在化したと考えられる。なぜなら、トラウマとなる経験を以前にしていると、その後のトラウマとなる経験では一層ひどい症状をしめす(斎藤 35)からだ。

ジョンを心の傷に苦しむ重篤^{じゅうとく}な患者として考えれば、ジョンの残忍なふるまいと、その自分のやったことの記憶喪失はありうるものになる。要約すれば、ジョンは戦争神経症の極端な苦しみを体現していることになる。この場合も、『失踪』は、戦争を経験して帰国した兵士が戦争神経症に苦しみつつけている姿を描いた作品ということになる。

キャシーの失踪について、「語り手の私」が示している6つの可能性について、そのそれぞれを検討した。その6つすべてが、ジョンが戦場で経験したことやその経験が生みだしたことが原因になっていることが明らかになった。キャシーの失踪は、すべてジョンのベトナム戦争体験が原因となっている。さらにキャシーの失踪が原因となって、ジョン自身も失踪している。結果的に、戦場で戦って幸運にも生き残って故国に帰ってきても、兵士は戦場にゆく以前のような平和で安心できる日常の生活には戻れないことが、妻の失踪の6つの場合に分けて推測されることになる。

だからこの作品は、主人公のジョンから考えても、「中心的な謎」であるキャシーの失踪から考えても、帰還兵士の苦しみと困難とを描いているといえる。

兵士は生きて故国に戻ってきても、戦場で経験したことのために、まわりの人間を苦しめ、自分自身も苦しまなければならないという悲劇に、読者は目を向けることになる。オブライエンの別の作品の言葉を使えば「わたしは生きのびたが、それはハッピーエンドではない (I survived, but it's not a happy ending.)」(Things 58) ことを描いているのだ。しかし、この作品の理解はここでは終わらない。なぜなら『失踪』は、先にも述べたように、「語り手の私」が作品中に直接介入している特殊な作品構造をしているからだ。

語り手の私

その「わたしは生きのびたが、それはハッピーエンドではない」点に、「語り手の私」が、ウェイド夫妻の失踪に関心をもち4年強におよぶリサーチのすえに、夫妻の失踪を作品化した理由がある。ジョン・ウェイドと同じベトナム戦争を戦った「語り手の私」は、「(私たちの小隊がおこなった) 極悪非道、つまり私たち皆の内にいつまでも生きつづける不愉快な秘密がある。私にもわたしの上等兵ウエザビーがいる。わたしの鋏をもった老人がいる」(301n) と告白している。夫妻の失踪を語りおえた「語り手の私」は、ジョンと自分自身とが近いことを鋭く自覚している。もし仮にもう1年早くソンミ村にチャーリー小隊と一緒に行っていたら、自分がジョンと同じようなことをしていただろうと痛切に意識している (Heberle 259)。

そのような「語り手の私」にとっても、ベトナム戦争での経験と帰国してからの経験とは、おそらくジョンと同じような、愛する妻にも語れないような、それゆえにこそ愛する妻をも苦しめる痛切な苦しい経験でもあった。その痛切で苦しい経験を抱えて、「語り手の私」はベトナムから帰国してから20年以上にわたって生きつづけてきた。その困難は、キャシーとジョンの失踪が暗示するような失踪を、「語り手の私」自身が選びたくなるようなものでもあったのだろう。言いかえれば「語り手は、ウェイドの経験と性格に、ひじょうに多くの自分自身の姿を見いだしている」(Herzog 2000, 903) といえる。「語り手の私」がジョンとキャシーの失踪の秘密を探ることは、間接的ではあるが、自

分自身が目を背けて曖昧にしてきた苦しみに再び目を向けて、言葉を使って明確に再検討しようとする試みなのだ。

「語り手の私」は、4年を超えるリサーチで集めた「証拠」をもとに、ジョンの悩みと苦しみと、さらにキャシーの失踪の6つ可能性とを「仮説」して、つまり想像・創造して、自分の言葉で語っている。言葉にすることで擬似的な追体験をしている。その擬似的な追体験を語り終えたとき、その追体験は、「語り手の私」の言葉を使えば、「ジョン・ウェイドの試練の方が、つまり何十年にわたる沈黙と嘘と秘密の方が、私自身のずっと昔の経験（＝ベトナム戦争）よりもはるかに本物のように思える生きいきとした^{なま}生の明晰さをもっている」（301n）と実感する経験だった。あるいは「私の経験した戦争は、私に属していない」（301n）とさえ最終的には感じざるをえないほどの経験でもあった。「語り手の私」は、ウェイド夫妻の失踪を語ることで、自分を取り巻いている現在の困難は、自分のベトナム戦争の経験とその後の苦しみとを直視し言語化するという困難をひき受けずに生きてきたことにもよると感じとったのだ。

ジョンがベトナム戦争を経験したことで、結果的にキャシーとジョンは失踪せざるをえなかった。その2人の悲劇を推測をまじえて語ることで、「語り手の私」は自分の現在の困難と苦しみを間接的に理解することができた。結果として、ベトナム戦争を経験したために生じた現在の生活を送るうえでの困難を切り抜けるための手掛かりを見出した感触をえている。「語り手の私」も「たぶんそれがこの本の目的なのだ。私に思いださせるために。消えた私の人生を取り戻すために」（301n）と注釈を加えているように、『失踪』は「語り手の私」がベトナム戦争にまつわる経験を思いだし、消えた自分の人生を取り戻すために、つまり確かなかたちで生きのびるために、キャシーとジョンの失踪の物語を語っているのだ。

語ることが生きのびるための手段となっている。心理学者のハーマンもペダーソンもトラウマを生んだ体験を語ることがトラウマからの回復への重要な一段階であることを述べている（Herman 175; Pederson 338-39, 350）。また、オブライエン自身も、別の作品の中で語り手に「物語は過去を未来に結びつけて」（*Things* 36）そして「真実を明確にし、分かりやすくするのに役立つ」

(Things 152) と語らせている。さらに、「書くことによって、もし書かなければ麻痺状態かそれよりも悪化していただろう、混乱した記憶を突き抜けることができた。物語ることで、人は自分の経験を客観化できるのだ」(Things 152) とも語らせている。

「語り手の私」は、自分自身を理解し再生するためにこの物語を語っている。「語り手の私」にとっては、『失踪』を語ることは、ベトナム戦争から帰還してから、自分が苦しんできた現在の困難を切りぬけて、確かに生きのびるための一つの手段でもある。だから『失踪』は、「語り手の私」がベトナム戦争を経験したために生じた、生きるうえでの困難を、ウェイド夫妻の失踪を語ることで間接的に再検討し、その困難から抜けようとした試みを描いた作品だともいえる。

注

- (1) (301n) はテキストの301ページの注釈 (note) の部分を意味する。以下同様。
- (2) この「語り手の私」は、ベトナム戦争に従軍して、ソンミ村虐殺の現場を、事件の1年後に訪れているという点において、また、ベトナム戦争からの帰還兵について関心をもっている作家である点においても、作家オブライエン自身の経歴をちょくせつ反映している。「語り手の私」は「オブライエン自身のペルソナと思える」(Heberle 218) という批評家もいる。しかし著者のオブライエンは、自著の『本当の戦争の話をしよう』(*The Things They Carried*) (1990) への対応から考えれば、いかにその類似点多くとも、「語り手の私」がオブライエン自身であることは認めないと思われる。
- (3) たとえばケリーは、2001年から2010年までは、ニューヨークにあるニュースクール (The New School) という大学の学長になって大学の拡大に辣腕をふるった。2012年には、敗れてはいるが、上院議員に再挑戦している。部下による告発後も、華々しい経歴である。オブライエンが創作したジョン・ウェイドは、ソンミ村の虐殺に加わっていた事実が暴露されると、世間によってその存在をほぼ全否定されている。しかし現実のロバート・ケリーは、作家の想像力を超えたしぶとさで、その後も著名人でありつづけている。作家の想像力をも超えた興味ぶかいアメリカの現実である。それもあってか、ジョン・ウェイドの選挙における地滑りの大敗は「まったく説得的ではない」(Worthington 44) と主張する人もいる。
- (4) このようなマジックへの熱中ぶりは、作者オブライエン自身の少年時代の熱中

ぶりを反映しているようだ (Heberle 248-49)。そしてオブライエンも、回想のなかで (この回想そのものの信憑性に疑問は残るのであるが)、自分の子ども時代は「丸ぽちゃで、友だちもいなく孤独だった (chubby and friendless and lonely)」 (“Vietnam” 52) と語っている。

- (5) 2匹の蛇がお互いを飲みこんでゼロになるという想像は、ジョンとキャシーが共に失踪することを象徴していると解することもできる。
- (6) ジョンは戦友の殺害に沈黙を守りとおして、今も批判をまぬがれている。この隠している事実、今も彼を苦しめている悪夢の一つの要因だろう。

Works Cited

- Belknap, Michal R. *The Vietnam War on Trial*. U P of Kansas, 2002.
- Cohen, Samuel. “Triumph and Trauma: *In the Lake of the Woods* and History.” *Clio*, vol.36, no.2, Spring 2007, pp.219-36.
- Farrell, Susan Elizabeth. *Critical Companion to Tim O’Brien: A Literary Reference to His Life and Work*. Facts On File, 2011.
- Franklin, H. Bruce. “Plausibility of Denial: Tim O’Brien, My Lai, and America.” *The Progressive*, vol.58, no.12, December 1994, pp.40-44.
- Heberle, Mark A. *A Trauma Artist Tim O’Brien and the Fiction of Vietnam*. U of Iowa P, 2001.
- Herzog, Toby C. *Tim O’Brien*. Twayne, 1997.
- . “Tim O’Brien’s ‘True Lies’ (?)” *Modern Fiction Studies*, vol.46, no.4, Winter 2000, pp.893-916.
- McGeary, Johanna, Karen Tumulty and Viveca Novak. “The Fog of War.” *Time*, vol.157, no.18, 7 May 2001, pp.24-33.
- Melley, Timothy. “Postmodern Amnesia: Trauma and Forgetting in Tim O’Brien’s *In the Lake of the Woods*.” *Contemporary Literature*, vol.44, no.1, Spring 2003, pp.106-31.
- The New Republic*. “Anti-Hero.” 14 May 2001, p.11.
- “My Lai Massacre.” *Wikipedia*. https://en.wikipedia.org/wiki/My_Lai_Massacre. Accessed 19 July 2018.
- O’Brien, Tim. *In the Lake of the Woods*. Houghton Mifflin, 1994.
- . *The Things They Carried*. 1990. Houghton Mifflin Harcourt, 2009.
- . “The Vietnam in Me.” *The New York Times Magazin*, 2 October 1994, pp.48-57.
- Pederson, Joshua. “Speak, Trauma: Toward a Revised Understanding of Literary Trauma Theory.” *Narrative*, vol.22, no.3, October 2014, pp.

333-53.

- Piwinski, David J. "My Lai, Flies, and Beelzebub in Tim O'Brien's *In the Lake of the Woods*." *War, Literature & Arts: An International Journal of the Humanities*, vol.12, no.2, September 2000, pp.196-202.
- Smith, Patrick A. *Tim O'Brien: A Critical Companion*. Greenwood P, 2005.
- Vistica, Gregory L. *The Education of Lieutenant Kerrey*. St. Martin's, 2003.
- . "Should We Forgive Bob Kerrey?" *Forbes*, 21 June 2016.
<https://www.forbes.com/sites/gregvistica/2016/06/21/should-we-forgive-bob-kerrey/#4f11c22c649b>. Accessed 1 April 2018.
- Worthington, Marjorie. "The Democratic Meta-Narrator in *In the Lake of the Woods*." *Explicator*, vol.67, no.2, Winter 2009, pp.120-23.
- Woititz, Janet Geringer. *Adult Children of Alcoholics*. Health Communications, 1983.
- Young, William. "Missing in Action: Vietnam and Sadism in Tim O'Brien's *In the Lake of the Woods*." *Midwest Quarterly*, vol.47, no. 2, Winter 2006, pp.131-43.
- 『朝日新聞』「帰還した3人相次ぎ妻殺害」2002年7月27日（夕刊）。
- 斎藤学『アダルト・チルドレンと家族』1996年 学陽書房 2006年。
- 野間正二『戦争 PTSD とサリンジャー』創元社 2005年。
- 「ヨシュア記」『新共同訳 聖書』日本聖書協会 1994年 340-79頁。